

歴史家が自己を省みるとき

—ブシュロン『歴史家を職業とする』、
ヴネール『失踪者 シルヴァン・ヴネールに関する調査』について—

外国語学部 真野倫平

はじめに 歴史家の自己省察

歴史家が自己を省みるとはどういうことか。イヴァン・ジャブロンカが『歴史は現代文学である』（2014）で指摘するように、歴史家の自我の存在は近代歴史学における重要な争点の一つだった。十九世紀に近代歴史学の礎を築いたジュール・ミシュレは、作品の中でおのれ自身について語ることをためらわなかった。しかし実証主義の時代に歴史が大学において制度化されると、歴史は科学としての客観性を要請されるようになった。歴史家は高度な技能を持つ専門家と見なされ、自我をさらすことは時代遅れのロマン主義として否定されるようになる。「歴史における自我は、ナルシズムであるだけでなく、科学ならざるものでもあるがゆえに、憎むべきものである。化学や天文学が非個人的なものであるように、自我の抹消が歴史家の客観性を保証する。それは価値論的中立性を、マックス・ヴェーバーが二十世紀初頭に推奨したあの価値自由を保証する¹」。歴史家の自我は科学の客観性の名のもとに「憎むべきもの」として封印され、「私」は「われわれ」に取って代わられた。

二十世紀になっても、歴史家の自己言及はあくまで例外的にのみ許されるものだった。歴史家が「私」について語るのはたいてい、まえがきやあとがき、謝辞や注といった、本文に対するパラテキストにおいてだった。あるいは、学術書以外のエッセー、啓蒙書、自伝といった周辺の業績においてであり、それは多くの場合、功成り名を遂げた大家のみに許される一種の例外的な特権と見なされた。

1980年代に「言語論的転回」による「物語の復活」が起こり、歴史における語り手の存在が注目を浴びるようになると、歴史家の自我は再び関心の対象となる。しかし、「歴史は物語である」というナラティヴィズムの決まり文句は、歴史的真理に対

1 Ivan Jablonka, *L'histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Seuil, 2014, p. 80. 邦訳はイヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である 社会科学のためのマニフェスト』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018年、62-63頁。

する懐疑主義を蔓延させ、ひいては歴史修正主義につながるものとして警戒の対象となった。「結局、言語論的転回は両義的な影響をもたらすことになる。歴史家たちは自らの方法論の説明に神経を尖らせるようになったが、その際に、書法をレトリックとフィクションのトロイの木馬と見なし、そこから排除するようになった。[…] こうして科学と文学という、二つの超大国のあいだの冷戦が永続化することになったのである²」。こうして、歴史は文学と科学の境界で袋小路に陥り、自発的な活動を封じられた状態にある。

ジャブロンカは、このような閉塞状況を打破するために、歴史に文学的手法を導入しようと試みる。たとえば「方法としての『私』」として、歴史家がおのれの自我を著作の中で積極的に活用することを提案する。それはロマン主義的な自我の表出ではなく、歴史家が研究過程を読者の前に公開し、おのれの方法自体を開示することである。

方法としての「私」は、研究の主題とは独立して実行されうる。その認識上の力を利用するために、自分の村や、自分の党派や、自分の家族について研究する必要はまったくない。というのも、それは論理でも形式でもあり、形式における論理だからである。それは、研究のプロセス全体をごまかし入念で滑らかな結果だけを示そうとする客観的モードに、脚注よりも巧みに亀裂を入れることを可能にする。それは物語をはめ込むことによって、ある状況に置かれた個人が探究に身を投じ、研究し、目撃し、感じ取る姿を指し示す。語るのはもはや大文字の〈歴史〉ではなく、研究者である。発言はついに発話者を持ったのだ³。

ジャブロンカの提唱する「方法としての私」は、実証主義歴史学の「客観的モード」の対極にある。後者が非人称的な語りによって客観性の印象を与えようとするのに対し、前者は発話者の存在を明示することによってその個別的な立場を明るみに出す。自分が属する国籍・階級・ジェンダー・信仰・文化に由来する特定の価値観を明らかにすることは、歴史家としての立場を客観化することに役立つ。逆説的であるが、主観的モードは語りの客観性を高めるための方法なのだ。

ジャブロンカは実際に、自らの歴史研究において「方法としての私」を活用している。『私にはいなかった祖父母の歴史』（2012）においては、アウシュヴィッツの強制収容所で亡くなった祖父母の生涯と自らの調査の過程を並行的に物語る、独自のスタ

2 Ibid., p. 109. 邦訳87頁。

3 Ibid., p. 293. 邦訳246頁。

イルを確立した。また、『歴史家と少女殺人事件 レティシアの物語』（2016）においては、無残に殺害されたレティシアの生い立ち、事件の捜査の進展、自身の調査の過程を断片化し再構成するという手法を取った⁴。結果としてこれらの作品は、歴史研究であるだけでなく、歴史家の調査を描いたドキュメンタリーとしても読むことができる。

しかし、このような歴史の書法の革新は、ジャブロンカのみに見られる現象ではない。二十一世紀に入り、フランス歴史学において、伝統的な歴史叙述の枠を破った斬新な作品が次々と作られている。われわれはこれまでに、アラン・コルバン、パトリック・ブシュロン、シルヴァン・ヴネールらの試みについて論じた⁵。本論では、ピエール・ノラ『自己史に関する試論』（1987）、パトリック・ブシュロン『歴史家を職業とする』（2011）、シルヴァン・ヴネール『失踪者 シルヴァン・ヴネールに関する調査』（2012）を取り上げ、歴史家の自己省察という問題について考察したい。

1 ノラ編『自己史に関する試論』（1987）

ピエール・ノラは『自己史に関する試論』（1987）において、七人の著名な歴史家に「歴史家が自分自身の歴史家になるという実験的な試み」を依頼した。彼はこの試みが新ジャンルを創設するものであると自負し、それを「自己史」*ego-histoire*と命名した。「しかし、彼らが性急な注文に応じて執筆してくれたこと、こうして集まってくれたことは、『自己史』という一つのジャンルの錬成に大きく貢献した。歴史意識の新時代にふさわしい新ジャンルである⁶」。ノラによれば、このジャンルの誕生の背景には二つの要因がある。第一に、歴史家の非人称性に対する信頼が揺らいだこと、第二に、現代史が市民権を獲得したことである。

4 『歴史は現代文学である』については拙論「イヴァン・ジャブロンカと歴史記述の問題について」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第24号、2018年3月、51-62頁を、『歴史家と少女殺人事件』については拙論「歴史家の目がとらえた三面記事事件—イヴァン・ジャブロンカ『レティシア』について—」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第26号、2020年3月、63-74頁を参照。

5 拙論「歴史におけるフィクションの役割—コルバン『知識欲の誕生』、ヴネール、ブシュロン『条件法の歴史』について—」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第27号、2021年3月、13-23頁を参照。

6 Pierre Nora, « présentation » aux *Essais d'ego-histoire*, Maurice Agulhon, Pierre Chaunu, Georges Duby, Raoul Girardet, Jacques Le Goff, Michelle Perrot, René Rémond, réunis et présentés par Pierre Nora, Gallimard, 1987, p. 5.

歴史家はこの一世紀、学術的伝統に従って、おのれの仕事を前に自身自身を消し、おのれの人格を知の背後に隠してきた […]。史学史研究の成果により、ここ二十年ほどのあいだに、この非人称性のいかがわしさ、その保証の頼りなさが明らかになった。それゆえ今日の歴史家は、過去の歴史家と違って、おのれの仕事に対する緊密で内的できわめて個人的な関係を認める用意ができています。 […] 実存のかかわりを明示し分析することは、公正な研究から遠ざけるどころか、理解のための道具や原動力となるのだ。

この同じ伝統の全体が、実証的な扱いを受けるには近すぎると判断された、現代史に対する堅固な不信をはぐくんできた。歴史家がおのれの世紀や現在を征服したことは、この分野におけるここ数十年の前進の一つである。これによって、重大な障害と思われていたものが克服可能であり、現在を歴史的に理解することが可能であるのみならず必要であることが示された⁷。

第一の点は、実証主義以来の「歴史家の客観性」への信頼が揺らいだことを意味する。今日ではもはや誰も、歴史家が党派を超えた客観的な立場にいるとか、客観的モードが視点の中立性を保証するなどとは信じていない。「スタンドポイント・エピステモロジー」の観点からすれば、歴史家がおのれの個人的な立場を明らかにすることこそ、研究の客観性を高めることに役立つことになる。

第二の点は、歴史の分野において「現代史」の重要性が増大したことを意味する。現代史の対象となる出来事は、われわれが生きる今日の世界とより密接に結びついている。それゆえに現代史における過去の解釈は、現代の政治問題や社会問題から直接影響を受ける（このことは、ノラが手掛けた論集『歴史の場』における「歴史と記憶」の問題にも通底する）。それゆえに現代史の隆盛は、象牙の塔に閉じこもる歴史家——現実世界の利害を超越した特権的な存在——という伝統的なイメージを破壊することに貢献した。

しかし、この「自己史」は本当に、歴史において画期的な新ジャンルを拓いたといえるだろうか。ジャブロンカは、二十世紀における歴史家の自己言及——序文、自伝など——について論じつつ、ノラが導入した「自己史」にも言及している。

アカデミックな世界において、書法は権力の分配を反映する。規則を定めたり違反したりする者は、栄光の頂点にいる。彼らは豊かで快適な文体でペンを走ら

7 Ibid., p. 5-6.

せる。彼らはキャリアの頂点をしるしづける教科書やエッセーにおいて、自らの好みを示し、フランスを称える権利を持っている。彼らの「私」は、序文や自伝における、そしてやがて1980年代末にピエール・ノラが導入した「自己史」における市民権を持っている。それ以外の者、つまり大部分の大学人にとって、書法とは、同僚同士で外出するために身に付けなければならない衣服のようなものだ⁸。

ジャブロンカが問題にするのは、ノラが歴史家を選ぶさいの基準である。ノラが「自己史」を依頼した七名の歴史家は、いずれもこの領域における大家ばかりである。ということは、「自己史」の正当性そのものが著者自身の評価に支えられているのではないか。その意味で「自己史」は、厳密な意味での新ジャンルというよりは、むしろ伝統的な歴史家の自伝——大家のみに許容されるある種の特権——を踏襲したものにすぎないのではないか。

2 ブシュロン『歴史家を職業とする』（2010）

この「自己史」の企画は、フランスの歴史学界に重要な影響を与えることになる。フランスでは1984年のサヴァリー法により高等教育法の改革が行われ、さらに1988年の法例によって研究指導資格（アビリタシオン）取得のための必要書類に「候補者の学術活動の総括」が含まれることになった。この制度改革はある意味で、ピエール・ノラの提案した「自己史」という企画が、歴史学の大学制度に吸収されたことを意味している。

この問題に関して、パトリック・ブシュロン『歴史家を職業とする』（2010）を取り上げたい。同書は定義しがたいテキストであり、あたかもベンヤミン論のように始まるが、やがてブシュロン自身の歴史家としての経歴を振り返る「自己史」へと移行し、さらに「自己史」という制度そのものへの批判へと変わってゆく。実はこの著作自体が、ブシュロンが2009年に研究指導資格を申請したさいの総括論文にほかならない。

ブシュロンは同書で、研究指導資格の制度改革そのものを問題にする。彼の指摘によると、歴史家たちはこの制度改革にさいして、正面から反対するのではなく、制度自体に懐疑的な態度を示しながらも受け入れるという姿勢を取った。「つまり、みなこれらの規則を実践したのだが、それは積極的に引き受けたのではなく、こんなも

8 Ivan Jablonka, *Op. cit.*, p. 94. 邦訳74-75頁。

のは信じないとうそぶき、皮肉な距離を取りながらだった。この奇妙な『信仰なきふるまい』は、人類学者が儀式を実行する者たちに質問するさいに観察するものに似ている。私が思うに、それは、学術分野が歴史研究の主体に付与する認識論的に不確かな地位について多くを語っている⁹」。

歴史家の認識的地位の不確かさとはどのようなものか。ブシュロンは史学史的な観点から、近代フランス歴史学の歴史——十九世紀における文学とのライバル関係、二十世紀における社会学・人類学とのライバル関係、精神分析に対する拒絶の姿勢など——を振り返ったうえで、歴史学が二十世紀において自らの認識に関する理論的内省を十分に行ってこなかったと結論づける。「歴史という学術分野は、人がどう考えようと、前世紀の重要な認識革命とされるものに、まったく真剣に向き合ってこなかった¹⁰」。ブシュロンは理論的内省の欠如というこの批判を、「自己史」というジャンルに、そして大学の研究指導資格に関する改革そのものに向ける。

私の考えでは、団体が大学改革を一気に示すために用いたこの語自体が、その歴史を振り返れば、あの不確かさを証言している。これはまだ二十年もたっていない新語である。というのも、ピエール・ノラが1987年に幾人かの著名な歴史家の知的自伝を『自己史に関する試論』というタイトルのもとに集めたさいにこの語を用いたのだから。この企画は、方法上の革新というよりも出版社の提案というべきである。編者は熱烈な「序文」において、企画をごく簡潔に説明し、対象を曖昧に理論化しただけだった。これらの試論はめったに内省的ではなく、様式もさまざまで、告白のぎこちなさだけを共有していた。それらは歴史家の目にも説得的ではなかった。彼らの多くは、ピエール・ブルデュー——それを伝記という幻想の大学版としか見なさなかった——と同様に、それらに厳しい評価を下していた¹¹。

ブシュロンは同書で、史学史的な視点から1970年代以降の歴史学の歩みをたどりなおす。いわゆるポストモダンの時代において、言語論的転回の到来によって「物語の復活」がうたわれたことがあった。そのとき、歴史の書法の問題が注目され、歴史と文学のあいだの境界線が揺らいだ。「長いあいだ、多くの者が、歴史の分野を革新

9 Patrick Boucheron, *Faire profession d'historien*, Publication de la Sorbonne, Collection « Itinéraires » - 8, Nouvelle édition, Points, « Histoire », 2016, p. 46.

10 *Ibid.*, p. 48.

11 *Ibid.*, p. 48-49.

する方法の一つは（あるいは、より正確には、ポストモダンの知や言説の価値の秩序の新たなシステムにおいて歴史が知の権威を回復する方法の一つは）、歴史とフィクションの境界をかき乱すことだと考えてきた¹²。とはいえ、この歴史と文学を再接近させる試みは、予想外の展開を迎える。「歴史は物語である」という物語論の決まり文句が、歴史的眞実に対する懐疑主義を呼び覚ました。その結果、歴史における文学性の復権は危険な修正主義につながるものとして警戒の対象となり、歴史の書法を改革する野心は封印されることになった。「というのも、危険は実際に存在し、それは予期せぬところから現れた。1970年代末、それは修正主義という名を取った。[…]私の世代はみなそうだが、私は、1970年代の『楽しい歴史』の雰囲気をはっきりと打ちこわした、この寒波が吹き荒れる時代に歴史研究を始めた。というのも、われわれは依然そこにいるからだ¹³」。ここには、ジャブロンカと同様、歴史が今日科学と文学のあいだで閉塞的状况に陥っているという認識がうかがわれる。

ブシュロンは以上の状況を踏まえたくて、あらためて歴史とフィクションの関係を問いなおす。歴史書と小説という二つのジャンルは、形式的には多くの共通点を持つ。しかし歴史家たちはこれまで、両者の違いについて、理論的な省察を積み重ねてこなかったのではないか。

タイトル、章立て、人物、ときにプロット、そしてかならず結末——歴史書はほとんどの形式的特徴を、親戚である小説と共有している。しかし歴史書を読むことは同じ効果を生み出すのか、あるいは、特別な感動、独特の注意、固有の理解をもたらすのか。さらにこういう質問もある。文学批評は小説家の信仰契約について無限のアイデアを持っているが、われわれは認識のプロセス——歴史書が眞実を語っているとわれわれが信じ始めるとそれは揺らぎだす——について同じくらい進歩しているのか¹⁴。

ブシュロンはこうして二つのジャンルのあいだを往復するが、それは両者をテキストとして同列に読み解くためではなく、むしろそれぞれの特性を明らかにし、それによって歴史の書法を豊かにするためである。実際、ブシュロンは、そのような稀有な例として、ジョルジュ・デュビイー『ブーヴィーヌの戦い』（1973）——一つの歴史的

12 *Ibid.*, p. 180.

13 *Ibid.*, p. 181.

14 *Ibid.*, p. 152.

事件を「事件」「注釈」「伝説」の三つのレベルで重層的に語る試み——を挙げる。「そういうわけで、以下の点を示すのは重要なことだ。すなわち、ジョルジュ・デュビエーの文学的な仕事は、彼を歴史家の要求からいささかも逸らすことなく、たえずそこに引き戻しているということ。さらに、彼の書法の運動のうち、声と時間の振幅のうちには、常に抑制され警戒感に満ちた震えがあり、それが歴史研究の力学をはっきりと描き出しているということ¹⁵⁾」。ブシュロンは最後に、新しい書法を創造することで歴史というジャンルを刷新することを呼びかける。「今、何をなすべきか。いずれにせよ、確かなのは——このまま続けていてはいけない。何か別のものを発明せねばならない¹⁶⁾」。

3 ヴネール『失踪者 シルヴァン・ヴネールに関する調査』(2012)

シルヴァン・ヴネール『失踪者 シルヴァン・ヴネールに関する調査』(2012)もまた、自己史というジャンルに対する批判的考察である。同書は、ブシュロン『歴史家を職業とする』と同様に、研究指導資格(アビリタシオン)申請のさいに提出された総括論文を出版したものである。ヴネールは「前言」において、ブシュロンの前掲書の刊行、ならびにブシュロンが編集責任を務める«Itinéraires»コレクションの創設によって、総括論文の出版が制度として定着し、ここに「新ジャンル」が誕生したと判断する。

『失踪者』は奇妙な歴史書で、失踪した歴史家自身を捜索するという架空の設定を取っている。もちろんこの「歴史家の自分探し」というフィクションは、歴史家の自己省察のメタファーであり、ヴネールはそこでこれまでの自らの仕事を総括すると同時に、歴史家の自己省察——とりわけ「自己史」と「史学史」というジャンル——を批判的に検討する仕組みになっている。

ヴネールの批判はまず、ピエール・ノラが導入した「自己史」の企画に向けられる。この企画は、当時の学术界を支配した「批判的転回」の潮流に押されたものであったが、実際にはそれが求めるような方法的革新を伴っていなかった。「歴史家は、おのれ自身を研究することで、たしかに対象を変えた。しかしこの変化はかならずしも、『批評的転回』の支持者たちが——研究者によって大きな違いはあるが——推奨するような方法的革新を伴わなかった¹⁷⁾」。一例を挙げると、著者の一人ジョルジュ・デュビエー

15 *Ibid.*, p. 156.

16 *Ibid.*, p. 193.

17 Sylvain Venayre, *Disparu! Enquête sur Sylvain Venayre*, Les Belles Lettres, 2012, p. 86-87.

は、最初はエッセーを三人称形式で書こうと試みたが、それが「わざとらしく」見えただために最終的に一人称形式を採用したと告白している。「長いこと——実は最終的な執筆に取りかかるこの瞬間まで——私の計画は、より距離を保つために三人称で書くことだった。わざとらしく見えそうなので、やめることにした。それでもせめて距離を保つようにはするつもりだ¹⁸」。デュビーは伝統的な「自伝」形式をやめて「自己史」にふさわしい新たな形式を創出しようとしたが、結局それを断念したのだ。結果的に、「自己史」というジャンルは、伝統的な歴史家の自伝——ジャブロンカが大家にのみ許された特権として批判したもの——を形式面で刷新するにはいたらなかった。

それゆえに「自己史」は、発見を導く方法というよりは、一つの立場であるように見える。一方で、それをを用いる歴史家は、自分たちの方法のごく一部——たいていは二十世紀半ばに社会史の分野で定められた方法——しか使用しない。[…] 他方で、これらの方法の有効性はたいてい、批評的手段によってではなく、歴史家の権威によって保障される。つまり、これらの証言の真実性は特に明白なわけではない¹⁹。

ヴェネールが次に批判の矛先を向けるのは、「史学史」というジャンルである。史学史とは「歴史の歴史」を研究することであり、歴史ジャンルの自己省察の試みである。史学史は当初、重要な歴史家たちの歴史観を比較検討する思想史というかたちで実践された。「大まかに言って、史学史家は二つの作業を行った。彼らは当初、歴史家がおのれの職業について順々にいかなる考えを抱いたかに注目した。[…] 彼らはこうしてさまざまな『学派』を区別した²⁰」。しかしこの作業は、伝統的な「思想史」の枠組みをそのまま受け継ぐかぎりにおいて、方法論的な革新をもたらすことはなかった。「比較的新しい対象——過去二世紀の史学史——を扱いながら、このような観点自体は真の革新をもたらすはしなかった。それは、思想史のきわめて古典的な観点を延長し、それを歴史的知識の分野に拡大しただけだった²¹」。

次に、史学史はとりわけ経済社会史的方法によって行われるようになる。「次に、史学史研究はおのれの研究計画に、経済社会史の方法——それまでは『戦争史』に対

18 Georges Duby, « Le plaisir de l'historien », in *Essais d'ego-histoire*, p. 109.

19 Sylvain Venayre, *Op., cit.*, p. 91-92.

20 *Ibid.*, p. 106.

21 *Ibid.*

する批判の先兵だった——を取り入れた²²」。歴史研究を経済社会史的観点から再検討することは、社会制度としての歴史学や、職業集団としての歴史家たちを分析するうえできわめて有効だった（ちなみに「戦争史」とは、アナル学派が前世代の「事件史」を批判するさいにしばしば用いた呼称である）。ヴネールは思想史のアプローチよりも経済社会史のアプローチをより高く評価するが、しかしこちらのアプローチも、「批評的転回」が訪れると、おのれの時代的限界と自己批判能力の欠如を露呈することになった。

とはいえ、1980年代に「批評的転回」が訪れたさい、史学史家たちは、歴史の知のカテゴリーの脱構築の企てを、経済社会史（および昔ながらの思想史）の方法——「批評的転回」がまさにこれらの方法に対抗して立てられた——によってしか説明しようとしなかった。彼らはこうして、かつて『アナル』の歴史家たちが、自分たちがあれほど批判した「戦争史」のかたちで『アナル』創刊を物語った、あの論理を再生産したのだ²³。

ヴネールの歴史家としての野心は、「社会科学における研究の革新を、その革新がもたらした方法の一つを使って説明しようとする²⁴」点にある。その意味で、『失踪者』は「自己史」に新たな形式を付与しようとするものであり、「自分探し」という設定はそのために作られたフィクションにはかならない。結局、同書においては最後まで失踪者を見つけることはできないが、その搜索の過程において、歴史をめぐるさまざまな問題が批判的に考察される仕掛けになっている。「われわれはその過程で、アルシーヴの性質や、著者と作品の関係や、大学における研究の現状や、さらに自己史や史学史といったジャンルの認識論的重要性について、少し考察することができた。時間や読書を必要としたあらゆる反省と同様に、われわれはこの反省を有益なものと考えることができる²⁵」。

おわりに

ブシュロン『歴史家を職業とする』とヴネール『失踪者』は、ともに「自己史」と

22 *Ibid.*, p. 107.

23 *Ibid.*, p. 108.

24 *Ibid.*, p. 114.

25 *Ibid.*, p. 159.

いう制度内で生み出された著作である。しかしそこには、制度に盲従するのではなく、それを批判的に考察しようとする強い意志がはたらいている。興味深いのは、そこに書法上の実験的な試みが絡んでいることだ。とりわけヴネールの『失踪者』は、歴史家の自己探求をある種の寓話的なフィクションとすることで、ブシュロンの著作以上に大胆な形式上の実験になっている²⁶。

ヴネールは同書の「結論」において、イタリアの作家クラウディオ・マグリスの伝えるある寓話——歴史家アイザック・ドイッチャーがユダヤ教のミドラーシュの中に見つけたもの——を紹介する。異端者の師とユダヤ教正統派の弟子が一緒に道をたどりながら議論を行った。弟子は議論に熱中し、正統派が通ってはいけぬ道に足を踏み入れそうになった。そのとき師は弟子を押しとどめ、自分とは異なる道を進むよう弟子に命じたという。「ミドラーシュ、ドイッチャーに続いてマグリスは言う——アケールは師であると。それは彼が弟子以上に物を知っているからでもなければ、弟子を自分のコピーにしようとするからでもない。まさに、弟子にどの道がふさわしいかを理解できるからであり、おのれが確信する道と異なってもそれを弟子に勧めるからである²⁷」。師は弟子に、自分と同じ道を歩ませるのではなく、おのれの道を探させる。この寓話を歴史というジャンルに当てはめるならば、歴史研究の進歩は個性豊かな歴史家たちによる絶えざる方法的革新によって実践されてきたということになる。ジャブロンカ、ブシュロン、ヴネールらの仕事は、理論的探究が高度な遊戯性とともに行われてきたフランス歴史学のそのような伝統の厚みを示しているように思われる。

付記

本論文はJSPS科研費19K00510ならびに2021年度南山大学パツへ研究奨励金I-A-2の助成による研究成果の一部である。

26 ヴネールとブシュロンの共著『条件法の歴史』(Sylvain Venayre, Patrick Boucheron, *L'Histoire au conditionnel. Textes et documents à l'usage de l'étudiant*, Mille et une nuits, 2012) もヴネール『失踪者』と同様に、歴史におけるフィクションの役割をフィクションの設定において論じている。注5に挙げた拙論を参照。

27 Sylvain Venayre, *Op., cit.*, p. 162.